

## 学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	深澤（川崎） 南土実 【比較社会文化学専攻 平成22年度生】	<p>本研究は、バレエ・デ・シャンゼリゼの全体像を明らかにし、本バレエ団の功績や役割を考察したうえで、このバレエ団をフランス・バレエ史上に位置づけることを目的としている。</p> <p>バレエ・デ・シャンゼリゼは、1945-1951年の約7年間、シャンゼリゼ劇場専属のバレエ団として存在し、当時の一流の芸術家たちが革新的な作品を発表した、パリ・オペラ座と並ぶ戦後フランスを代表するバレエ団であったにも関わらず、その活動と上演作品についてはこれまでその全貌が明らかにされておらず、学術的な研究はほとんどなされていない。本研究の学術的意義は、先行研究で指摘されたような「新しいダンス」を生み出したこのバレエ団の活動の軌跡を、バレエ・デ・シャンゼリゼのプログラム類や写真・映像資料、フランスとイギリスの当時の新聞・雑誌の批評や評価、バレエ団関係者の手記や著作、そして同バレエ団のスターであったジャン・バビレへのインタビューなどを一次資料として詳細に考察を進めたところにある。主に数々の上演作品を明らかにし、バレエ団の特徴やバレエ団の全体像を検討した。また、パリ・オペラ座バレエの同時期の活動も念頭におきながら、フランス・バレエ史上にバレエ・デ・シャンゼリゼを位置づけようとした。</p> <p>本論文に対する審査は査読に基づいて二回行われ、第一回審査会では、多くの一次資料を用いた実証的研究であり、フランス・バレエ史におけるバレエ団の位置づけを試みたことが高く評価された。しかし、フランス社会の文化的背景やオペラ座との関係が明確ではないこと、批評の扱い方や図版リストの作成などについて多くの指摘を受け、また、第3章における《若者と死》の作品分析が論文の内容から逸脱しているのではないかという意見もあり、内容の修正が求められた。第二回審査会では、以上の指摘に対し適切且つ妥当な加筆修正が施されていることを確認し、論文の完成度が高まったと評価された。</p> <p>公開発表後、それに引き続いて行われた最終試験における質疑応答においても、真摯な姿勢で満足すべき応答が得られ、研究に対する理解力と学力が十分であるものと判定された。</p> <p>以上の結果、本論文は博士論文としての到達点に達していると評価され、本審査委員会は全員一致で、学位申請者深澤南土実が最終試験に合格し、人間文化創成科学研究科の学位、博士（人文科学）Ph. D. in Dance Studiesとして認定するに値すると判定した。</p>
論文題目	バレエ・デ・シャンゼリゼ —第2次世界大戦後フランス・バレエの出発	
審査委員	(主査) 教授 猪崎 弥生	
	准教授 水村 真由美	
	教授 中村 俊直	
	教授 天野 知香	
	教授 鈴木 晶	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（可・<input checked="" type="radio"/>否）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;"><input checked="" type="radio"/>ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	